

## 新版まえがき

『いのちの法と倫理』を最初に世に送り出したのは一九九六年である。その後版を重ねたのち、二〇〇九年には共著者に加え『新・いのちの法と倫理』を刊行し、改訂を加えてきた。本書はこれら二書を前身とし、その蓄積を踏まえつつも全面的に内容を再検討して、新たな書として書き上げたものである。

四半世紀は長い。特に時代が進むほど生命に関わる技術はめざましく発展し、また社会状況も大きく変化を見せてきている。改めて新版として本書を上梓するに至ったのはこのことへの対応による。

しかし技術の発展、社会状況の変化にかかわらず、見失うことなく常に立脚すべき基盤があると私たち著者は考えてきた。それが「いのち」である。この点で、本書の基本姿勢は前身の二書と一貫している。本書は、生命倫理と呼ばれる問題群から六つのテーマを取り上げ、大学などで教科書として用いることができるように、基本情報や基礎的知識を提示し説明しているが、それ以上に著者が願うことは、本書が「いのち」の問題を真摯に考えるきっかけになることである。

そのため、一般の教科書とはやや異なったスタンスを取っている。

第一に、多元的な視点から問題を扱っている点である。タイトルに示されているようにまず、「と」倫理を、慎重に区別しつつも分離せず、両者の関わりを視座に入れて論を展開している。新たな技術の開発はただちに法律問題や倫理問題を引き起こさずにはおかない。そして法や倫理の解決策はさらに、宗教や文化の問題を無視して論じることとはできないだろう。生命をめぐる問題は必然的に学際的にならざるをえないのである。それは私たちの日常生活で実際に営まれている「いのち」がそれ自体、様々な側面をもった多面的多元的存在だからである。本書が「生命」の法と倫理でなく、「いのち」の法の倫理であるのもこのためである。

第二に、それぞれの問題について著者なりの解答を提示しようと試みている点である。概して教科書と呼ばれる本は、問題状況の記述と様々な立場の並列的介绍に留まるものが多い。しかし本書はあえて解答の試みにまで踏み込んでいる。著者もまた、読者と同じ地平に立つて問題を考え、論じたいと思うからである。もちろん、自分たちの考えを一方的に読者に押しつけようなどという意図はまったくない。本書は読者にまずボールを投げかける教科書であり、それを受けて読者自身が自分なりの答えを導き出す踏み台になればと願っている。

第三に、解答の提示まで踏み込んでいる以上、本書は一定の価値観、「いのち」の捉え方に立っている。それは「いのちの現場に寄り添う」という立脚点である。このことは、今日の生命倫理論の主流ともいべき現代リベラリズムの立場と一線を画することを意味する。それは多種多様な価値観の共存する現代社会において、各人の選好するライフスタイルの多様性を可能な限り許

容し擁護しようとする立場である。そこでは自分の生きる目標を自ら設定し、自分の人生を自分で計画し設計する、成熟した判断能力をもつ自律的主体が、正義の一般原理のもとに自由に自己選択した決定こそが尊重されるべきとされる。「生命倫理とは自己決定の倫理のことである」と断言する論者も少なくないほどである。

もちろん、自由意思による自己決定の余地はないとか、自己決定を重視すべきではないというわけではない。しかし、実際の生活世界に生きる「いのち」の現実には、むしろはるかに非選択的な出会いと偶然に満ちてはいないだろうか。まずもって「いのち」は、自分では選択不能な出生という偶然や親との出会いに始まる。死もまたそれ自体回避を選択できない現実である。「いのち」は「選ぶもの」と「選ばないもの」とから編み出される複雑な織物であるとすれば、選ばないものも受容しそこに価値を見出していくこと、そして「選べない関係」を「かけがえない関係」に変えていくこと、これが「いのち」の倫理ではないだろうか。「いのち」が各自の計画の中に自己完結するものでないとすれば、「いのち」の倫理は互いに思い遣ったり配慮したり、ケアしたりケアされたり、といった他者との関係へと開かれていくものとなるだろう。

さてここで、本書にとってきわめて重大な出来事を報告しなければならぬ。それは共に「いのちの法と倫理」に取り組み、導き続けてくださった葛生栄二郎先生の召天である。二〇一八年七月に五九年の生涯を閉じられた。大変悲しいことであったが、しかしその五年にわたる闘病生

活の歩みは「選びうるもの」「選びえないもの」への向き合い方を身をもって証してくださるものであった。葛生先生は、召天の直前まで介護タクシーも使いながら学生の教育にあたられた。副作用がさらに強い三度目の抗癌剤治療やホスピスに入ることは選択せず、大学で教鞭を執ることを選んだのである。また、深刻な病気であることが判明したあと、『「ロマ書」の人間学』（キリスト新聞社）の執筆に取りかかり、亡くなる五か月前に脱稿された。この二段組み、約五〇〇頁にわたる大著の副題は「ノモスにとらわれない生き方」である。この書は、人間は自分で自分を変えることはできないこと、そして変わらねばという呪縛からの解放のメッセージの読み取りであり、力を振り絞って私たちに渡してくれた「いのち」のバトンである。

もはやこの世では直接お会いすることはかなわないけれども、私たちは葛生先生との「かけがえのない関係」を、対話を、今もなお持ち続けることができる。その意味で、今回の新版もまた葛生先生との共著として完成に至ったものである。

最後になったが前書と同様、刊行にあたっては、法律文化社の皆さま、ことに田靡純子氏には多大なご尽力と励ましをいただいた。ここに改めて感謝申しあげたい。

二〇二二年一〇月二日

著者一同